旦人先生句画

911.3
ゾ

入山臺選蕉菴春興新詠

節三十四全集

竹林叢春百人全十二館選

竹林長春曰仝七十二翁撰

續三十里集

仙臺芭蕉菴春興新詠

三十里集自序

主 丈あふ

むかし男ありけり團子〱と云はく堀えするとて
よれとこなく〱と云て内に戻るやれ茶の自在鍵を女房
のひさいは升半團子種なる大臼を出しみりよいとさ
ふてハなしそ殺種冑ねよてなり居しハ汁團子を
捨てゝまくらへよと云てあの口説きハいしくと
云も團子のすよいとこふと云もたんこのすことと云へ
る知有の俳諧職乃法に我と思え来なし冒仏の若
は九字沢の山家の違のことくなり彼極みの天下一

の黍問子亦笠森か千世をさへ代るおそとこす
笑ひあひぬそをけ三十里集むす八三千里集て
問屋し曰人八十志つる寿

天保辛卯二年三月全

七十二翁作林舎日老人題

閑生

ありのミちをまよはさと梅の花と
鶯や半身に黒き月をかちり
手のひらに捶て戻るや福寿草
色る枝追ふ枝まて帯うな
肩にて掬ひよする柳かな
人の肩ちのゝまたすゝきれくれ
みそ垣ハおちるゝ住のきえあそか

弁林日老人 〇

竹林八歌仙

清晨を待ちて何をし梅が　天洲
草とはなれ葉もしらぬ花　丈葉
陶工の吟味もせめし床の窓　渚朱
精しさの手捏くや鉢鉢　桑英
春風や五線あつハ文字を之　人旨
梅咲て手ひらの画深花ハ　計花
持て来て梅をみれば話し　二只
香をうけて去る誤もよき杖に　有駒

九年くより不足ハ那了梅哉　中来
鶯ハ笠に二夜の隣の者孝
鶯の人に流さて平きの絶え　杉蔦
あるきてよれたまよ出る梅む　其人
執くの散梅さきる香かな　竹羽
九くなる蕾めとし梅哉　雨鵲

岑賣てをさ軒にたよ買　曰人

お垂又借て集る火のし八　仝

いときうよろ似雛のさり結　百古

川まて名ハ忘れさり菊の苗　危江

降る雨にも元の銘らの花　二兆

さり添て人にも出ア紙の市　曲全

結ると露にれぬめ嵐の梅　有昌

小さしきて押おかて忘る木のめ　汶里

飯ごの下結虎蓑て云まり八　方井

男気の何となきさと阿雁　七峨

梅々ア深梅よる餅の口　田鶴人

ふとりとうほらまくりさと阿雁　鮫水

眠読のく蟹の声ア羽唐　吉好

雨おもの本に讀人う止む梅に　蘿風

羽生ア占まよ唐写の札　如仙

螢や海亀容よさるとまえ　洛　言外堂兆三

頓妹の姪に射さる桜か井戸 八ヶい
梅本尼の西れ寺の梅が
是非ハ大男しまその貝 呈成
尼子浮くと露滴子又桜 阜人
え白も河くらさみろの角力加田人
たんぽ戸里ハぬ二方ヌ曲りた 長雄

畑主の桜伐しと ぬうしけり 江三
雑煮のうし嫁子 砂子を浮けま 荷乙

如才ある見るへむらんの蔭花あ 作人

廾井戯作

俳諧師の焼餅ハ
下女の洗濯もし

待桜子咲きて結句焼餅が園 作
との喜ばしきに笑ふ声ひね立る 台三

桜や小花を嫁ふ飯の注 世弁

姿見に来ては見よし高に 洪山

桜戸夜深まくらし
門の客 用和

暮戸外ぞ行投んを
帰る燕 大波

梅咲て春の
身匂ハ香り 一如

春風を
初元老を
明桂 斗楽

稲妻を投る者 嘉洋

黄ハ端を寺

乗出て静なる 佳代 宜嵐

桜戸目て咲よ
せる舟 芭人

小伝ハ京乃江戸
花咲り 公五

人なれハ集るやらん
なり鹿山
戸口ア桐咲り 桃栄

旅人の跡まて畑小田の雁　楓坡

又猿は八四五子有る春しも　寿代　馬尻人

取肉浅ハなのまさき
うけ私とのかき八周

鎌倉の隠ちたる
きゝん小　柳嶋

孙林七嫂

おそり餘兄とて山もは　志の女

雑居八時に譲りて名の春　そまく

隷色浪に紙採さ次の幟うふ　とくふ

梅うに醒て志まう
小さゑ　扇風

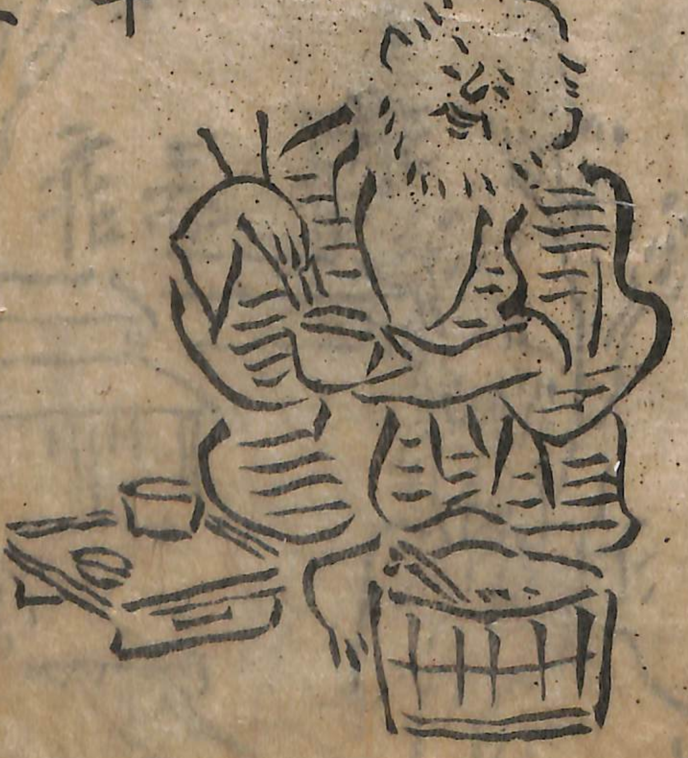
筆を廻して
りうまての毛　五乙

あの茶乃たそし
醒る志やり酒　素向

きれ晴梅し
梅も老木　日人

とれしとあるか
どさく勢力　木耳

首布乾しまえるもハ
とまき善の方　路玉



正月て
よれのよ
梅も咲るらう　董霞

米寮に星へ下るハ
ふめの宗　蘿木る

拿指て晩よ来るう
菊の苗　菖青

西宗で何一の
願えて咲性
栗嵐

邦みてハとつ乱りつ翁性魚和
柳濁出つ小家の叙に名寮箱

梅多乃猫濁と思ハさる　如旭
料理茶屋出て戻る
梅宗　松恕

吟懐小菜庵の
隠る田南乃　叙光
酒義と乱箱の
問の梅也　梅周

気に入ると宮戸帯の
小川文ハ緒　稲列

江戸隅のまり花客三人

浦人

飛月のかゝせし庄の
琵琶は　茶ず
猿の湯をうちて
足もむる猫の尿　し風

仲人の仲人
まる戸丈のめ結
亭主

鉢の唄てまくを咏みける　双三

茶屋飯後の安戸
うめの花　二丘

俳家物語自叙上篇

さる程に天保三年壬辰の
秋のころより先生の大将八丞
江戸表山城守虚白入庵あるを
うれれかゆゑそのうち合ひめぐりて一家
進む八併置玉沢一面琵琶酒瓶
持ち帰り織人講釈より六洞
ゆうくも日夜に徐々脈々六
誰もぞ杉風九世の孫わん杉山
杉風遺物の影から和陀やかに白に
成りしとその蓋西沢同媚流
論を判定とせ中にたり二た
とらう宗わとうけて其の風めでよし
計八ツかり亀

大公曰一行有失百行倶傾

初心平生不可忘

志賀の浦

茄子のをとり出てもひる

すぢ置琴爪

みそてんきの風情みゆる

木の葉りをす

めんどう絶板ひとの

小きし

りのそり肩伝ちつく 操挿

をいるむと詫びて掃十乗

大きに見えて小さく見えの軽き事

手前頁附も所ア

さハうな軍書とセ

弁井

自評春帖如戯画。雖非

王藍田奇石筆意及呉道子真龍之妙

披帖閲之不香嗅気衝鼻露歯笑為是

屁乎屁乎茲不屁当縷安臍乎莎為所

謂世尊拈華迦葉微笑雪北香由耳

亜芭矶巴覇於南神保方　竹林題。

寺嶋竹林居老人弟子求之證蔵

竹林居 周文

[illegible]